

ここに新円寂慈雲多宝信士こと故細川貞一殿、大正十六年九月十一日現住居にほど遠からぬ国道十六号沿いに細川正次郎・ハル夫妻の長男として生を受く。

今は昔、浅川、川口川の流れ清く、緑濃き田園風景のなか四男三女の兄弟のうち、おおらかに育まれしものなり。

十七才の頃より、一人前の農夫として家業に励みつつ、やがて終戦間近のこと故人にも赤紙舞い來たるらし。かくて出征、浜名湖なる浜名海兵団に配属さる。のち伊勢神宮防備隊に加わりたる時、隣接する同部隊某中隊の兵舎、艦砲射撃の直撃弾を受け中隊全滅、冷や汗十斗の思いするとか。紙一重の差にして、九死に一生得たるものなり。

また一説には、召集の折、出征軍人の姿見て、「兵隊さん、戦争は終わったのよ」と云われたるも、軍命なれば独断で帰る訳にもいかず某所に赴くとか。今となりては、定かならざる事多し。

とにもかくにも命永らえ、同年十月復員す。除隊に際し、毛布・銚缶・米などの分配あれど、農家なるを以て米は辞退す。されど家にたどりつけば米びつは空。幸いにも田んぼに稲あれば、その日のうちにこれを刈りて休む間もなく脱穀、ほっと一息つきたるものなり。戦後の混乱あるといえども、田畑あるありがたさなり。

やがて昭和二十四年十二月、縁ありて一才年下の初代殿と出逢い結婚、のち家

に三男を挙ぐ。されど長男和也殿を十二才で逆修を見、涙する日々あるとか。

故人その資性、誠に温厚、穏やかにして、優しき人なり。田畑をこつこつと耕し、自然の中に身をおきて、欲のなき人なり。ただこうと思いたる事には頑固、いわゆる一刻者にてもあり。

自然と共にすごしつつも、殊にも動物をいとおしみ、牛を飼いて乳をしぼる。乳搾りの最中に温かき牛の腹に顔あてて居眠りすること、度々とか。牛も心得てじっと動かず、なすがままにされしもの。大いなる信頼あればならん。

されど人手たらぬ時、ホルスタインを農耕用にと田など耕さんとし、ちと目離したるすきに逃げだし、一足先に牛舎に戻りたることなどあり。牛だけに、モロかなわんとモロしたるとか。

またある時、畑耕す折のこと近くにヒバリの巢あり。夜盗虫などみつけてはそのあたりに放りければ、やがてヒバリこれを餌となし、ついにはその手より直についばみ、やがては数百メートル離れた畑耕す故人をみつけ、虫などねだりたるものとか。近隣の農家の主婦、文子殿語りたる、自然と共に生きし故人の人柄惚ぶよすがなり。

また時には八南酪農組合の最後の組合長を務めその解散にあたり、多忙にして夏野菜の苗植える能わざることあり。およそ、他のために思いてなすなり。

かくの如くに人生中道をすごしつつ、内孫三子・外孫四子にも恵まれ、誠に幸

い多き年月すごし給いしものなり。

嗣子はじめ一家一門、この幸いの永遠にと思い、またその寿の百年を願うといえども、三年ほど前、いささか四大乱して病舎に伏したり。されどそののちは大よそ家に過ごし、老いを養いてあり。

徐々に食も細くなりて、

やがて八月十三日再び病舎に伏し、ある夕べ、恩愛の家に別れを告げ、北邸の風にゆらりゆらめいて黄泉の客となる。

時にあたりて、故人の来し方に思いをいたせば、農家の後継ぎとして生まれ、田畑を耕し、牛を飼いて乳をしぼり、これをいとおしむ。されば牛も故人になつき、他の人の云うことには、従わざりきとか。自然と共に暮らして、大地を耕す。農夫大地耕すとて、誰かヒバリを友となすや。

恵まれし愛孫七子をいとおしみ、また三ヶ月ほどなる曾孫愛羅ちゃんをこわごわ抱きて、連綿と続く命の絆を確かめ、良き冥土の土産となす。

一足先にみまかりし弟御正夫殿を追いて今日、浄らかな終の道を行く。御年八十才、まさに大往生なり。

本日ここに人皆集いて葬送の壇厳かにし、故人をなむ送らんとす。

惟みればその身陰徳の積もりて仏縁の深く、即ち幽境に馳せなばかの浄土にい

たりて、美しき蓮の池に遊ばん。

誰そ疑いのあらんや。

乃至法界、平等利益

ここに故人の遺徳を偲び敬って白す

平成十九年九月六日北岸山喜福寺 住職 村岡研一